
Non if

ヤン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Non if

【Nコード】

N3931A

【作者名】

ヤン

【あらすじ】

ただ普通の高校生活を送っていた彼。しかし彼女と会ってから「普通」は変わり始めた。刃を持つことになった彼に、彼女を守るという「普通」への障害が待ち受ける……。

第一話：最期

紅の雪が降り、新雪には同色の花が一輪咲いた。

花は数を増やし、花畑、と言うのが正しくなる。その花畑を汚すように倒れるのは、一人の男だった。

傍らには女がいた。彼女は膝から崩れ落ち、ただ呆然と彼を見ていた。

倒れた男のその体。片目は抉られ、右腕はなくなっていた。彼は紅い円を描いて、絵のように動かなかった。

傷だらけの、彼とは違うもう一人の男。まだら模様を白のキャンバスに作り出し、持っていた刃を彼女に向けた。彼は彼女に、一歩、もう一歩と近づいてゆく。しかし彼女は動かなかった。

紅の円はさらに広がる。その円は黒の靴で冒され、形を崩された。その中心に緩やかに立ち上がる独眼の男。存在している腕をいっばいに広げ、彼女には近づけまいとする。壊れた体は、彼女を守るためだけに使われた。

第二話：始まり

俺はとにかく疲れていた。

学校では、天使のような奴。しかし、家に帰ると奴は悪魔のようだった。そんな奴に縛られ、本当の家に帰ることもできなくなっていた。

今は奴の家、いや屋敷と言った方がいいか。屋敷にいる。ただし、動くことのできる範囲は制限され、一室で軟禁状態だ。足枷に手枷。しかも両手両足。それでいて、座ることができない状態なのだ。これほどきついことはない。

俺の腕が悲鳴を上げたかと思ったが、その音は違うものから発せられていた。茶褐色の蔽かなドアが、ちようつがいを唸らせたのだ。そしてその向こう側にいたのは、天使か悪魔か、今は悪魔の「奴」だった。

「今日は大人しくしていたようですね」

一風変わった瞳に俺は映っていた。俺は何も答えず、ただ壁にもたれかかるだけだった。

「奴」とは蒼を持った少女のことだった。

その蒼は、目だけでなく髪にまで及ぶ。容貌は幼く、しかしその中に美麗を秘めていた。俺をこんな状態にしているのが彼女と分かっている。見とれてしまうほどだった。

「そろそろ自分の立場をわきまえてはどうですか？」

いつの間にか目の前に立っていた蒼の少女。細い指先が頬に触れる。それだけで安らぎさえ与えられてしまうだろう。普通の者であれば。

自分の限界を知りたくもないのに知り始めている俺は、息を荒くして彼女を睨む。それは彼女には無意味な行動。だが、抵抗できる

術があるのだとしたらこれくらいしかない。腕は上がらず、足はもう動かなかった。

こんなことになったのは一週間ほど前の入学式だった。

賭けで受験したこの進学校。親は「入れなかったら破門じゃー！」と、少し発狂気味だった。親父の破門は勘当を意味していたと思う。多分。それが冗談だとしても勘当は困ることが結構あるので必死に勉強。その努力が実ったのか、賭け運の強い母親の願いがかなったのか。とにかく合格して入学までたどり着けたわけだ。しかしそれによって、つかの間の喜び、と言うのを我が身を持って実感させられた。

ただ普通に、そう、ただ普通に教室にいた。入学式の日と言うのは半日よりも早く帰ることができる。同じ学校から入学したのが一人で、しかも女でさらには違うクラスという、これは仲間はずれという制度がほぼ必ずと言っていいほど起こる事態だった。こんな俺には、もう早く帰りたいとの願望が脳内を血液のように流れていた。

やっと帰れる。そう思った直後、

「奴」は現れた。

彼女は全てをその目に引き寄せた。その場にいた生徒、教員は、ただただ見とれた。だが俺はそんなことをしている精神力など無く、さっさと帰ろうとしたのだが……他の生徒と同様、体全体がコンクリートで固められたかのようなだった。

音は無く、しかし唯一床が鳴る。規則的にメトロノームが動いている。そんな気がした。その音は数秒で止まり、その止まった場所が俺の前だった。

彼女のことは噂で耳にしていた。どんな芸術品にも勝る美しい女性がいる。ラピスラズリのような蒼は、誰をも魅了し、引き込む。間近で見ると、確かに引き込まれそうだった。

異様に白いその素肌は、太陽光をよく反射していた。蒼の髪は風になびき、様々な色で人々を魅了する。その時には俺も虜の一人だった。

意図的に目が合わされる。そこには微笑みが生まれていた。急に鼓動が速くなったのを知ったか知らずか——多分知っていたが——俺に美しい旋律を聞かせていた。

「私についてきてくれますか？」

名も聞かず、俺は彼女について行ってしまったのだ。

無駄に長く、金持ちしか乗らないような高級車に俺は素直に乗った。そして来たのが予想以上に巨大な屋敷だった。彼女は俺の手首を持ち、その屋敷に入ってゆく。容姿端麗で頭も冴える。しかも金持ちとは……。あゝ、懂れる。てか何でこんなに貧富の差があるんだ？ しかしこんなことを考えたのはあとのことで、この時は彼女が握っている手首だけに全神経を集中していた。

中は——言っちゃ悪いが——バカみたいに広い。俺は卒倒しそうだった。その代わり、何らかの打撃によって倒された。

目覚めた時には一室にいた。映画で見たことのあるような黒塗りの鉄球が手枷と足枷につながれていた。そしてその枷は俺にしっかりとつながっていた。あまりにも突然の状況に、俺は頭を捻るしかなかった。

そこに奴が現れる。さつきとは目の色が違う。そこには恐怖がこもっていた。

「目覚めるのが遅いですね。もう夜ですよ？」

時計を見ると、すでに九時を過ぎており……。あ、見たいドラマあったのに！ ではなく、そんなに気絶していたのか。そういえば、気絶したのって初めてかも。そんなことは考えていなかったと思うが、確かドラマのことは気にかけていた。

急に腕が重くなり、しかし鉄球は落ちなかった。転びそうにもなかったが、ただそこまでだった。目覚めた時も立ち尽くしており、俺

は自分が何者かを疑ったが、彼女の言葉によってその謎は解けた。

「今から貴方には、私のために働いてもらいます。貴方が私の出す条件に従えば、その枷は取り外しますし、高校に通っても良いです。しかしそれが嫌ならば、貴方はここで軟禁生活です。どちらが良いですか？」

そんな甘えるような顔で見られたら嫌だとは言えないが、さすがに条件を聞かなければ俺も救いようのない人間だ。何も言わないのに、彼女はそれに気づいたのか、その条件をひとつだけ言う。

「貴方の仕事は私の警護をすることです。二十四時間休まずに、とまでは言いませんが、それに近くなると思います」

あんたは人を殺す気ですか。

「ただ、命を失いかねないので、ここに一生軟禁されているのも良いかもしれませんね。立ったままで」

俺は一生寝たり座ったりできないのか！？

彼女は俺を嘲笑しているかのようだった。いや実際にいたのだろ。憎みきれない顔というのがむかつく。

「お嬢様、そろそろ……」

今まで全く気づかなかった。彼女の後ろには全身を黒で統一した男がいたのだ。いつからいたのだろ。しかし彼と彼女の間では彼は最初からいたような雰囲気が漂っていた。いなかったと思うけどな……。

彼女は何も言わずに部屋を出て行った。男が扉を閉めた時、その隙間から見えた眼光が気になったが、そんなことはすぐにどこかへ飛んでいった。急に鉄球が重くなったからだ。すでにここから出れないと分かった俺は、自分と違って真っ白な壁にもたれなかった。そして出るのは、疲れと不幸のため息だけだった。

人間疲ればどんな格好でも眠ることができるのだな。そんなことを起きたときに実感した。腕を天井に向けて伸ばすと、左右から

同時に重い衝撃が伝わる。鉄の塊のことを忘れていた。本当の痛みというのが声に変換できないことも知らされた寝起きだった。

これがおじいさんの古時計ですよ、と自ら主張しているような時計を見ると、なんと午後二時だ。睡眠時間自己記録を塗り替えそうな勢いだったが、最高記録は十六時間なのでまだまだ大丈夫だという意味の分からない安心を自分の中でしていた。そんなことはどうでも良く、俺は入学してすぐに休むと言うことに不安を抱いていた。学校に行けば、多分異様な目で見られるだろう。多分……。

この日は前日と同様午前中だけだったはずだ。だから奴も帰ってきているはず。案の定、奴は俺が起きる時間を知っていたかのように部屋に入ってきた。今日は後ろに男がいるのを確認することができた。彼女は、本来俺が座ることのできる椅子に座る。この時は本気で殴りたくなっていた。

「気分はどうですか、と聞いても良いわけがありませんよね。疲労が顔に出ていますから」

苦しむ姿でも見に来たんか。そう思いながら、彼女の言葉を聞いていた。

「一昨日言っていなかった条件を話しましょうか。条件はあと二つ。一つはこの家に住むことです。言ったとおり、警護をお願いしますからね。もう一つは、家族との決別です」

家族との決別……。

それは俺にとって最悪なことだった。赤の他人をここまで育ててくれたあの二人。家族との縁を切ることなど、俺にはできない。

「決心がつくまで、ゆっくりと吟味してください。どうせ今の状態でも、家族とは一生会えないと思います」

さすがに憤りを感じた。気づけば走り出しており、彼女の首を掴んでいた。それでも彼女は余裕を醸し出し、そして無表情で俺を見るのだ。思わず指に力が入り、しかしそれは無駄となった。喉に痛みを感じたのは俺の方で、さらには背にも激痛が走っていた。俺は壁に密接しており、男の腕が喉を押さえつけていたのだ。彼女は首

を触り、そして睨みつけてきた。

「怒りという感情は誰にでもあるものです。では、また明日」

そう言つて、彼女は部屋を出た。彼女には怒りというものがないのか。それともただ余裕なだけなのか。最後に俺の頬へ拳を飛ばし、昨日と変わらぬ黒の男は――。

昨日……？ さつき、奴は一昨日とか言っていなかったか！？

自分の中で狂つた時計を持った俺は、なぜか知らんがっかりした。

数日、同じことが繰り返された。よくもまあここまで死ななかつたなと思う。目の前には蒼。そうだ、そろそろ答えを出さなければ、俺はそろそろこのまま死ぬ。過労で。残されたのは、二つの答え。一生ここで生きるか、彼女を守つてゆくか……。多分俺の心は決まっていたのだろう。過つたのは、後者だった。

屈したくない力が口を開かせない。しかし俺は無理やりこじ開け――。

「……どうしました？」

声が出ない。どうしようか。それに気づいた瞬間、俺は意識を失った。

何の感覚もない。目覚めると、そんな感じがした。疲れているのだろうと考えながら、深呼吸して脳へ酸素を送った。渡された水を飲み、一息つく。寝台の傍らには黒の男がいて、俺を見るなり席を外した。しばらくすると、蒼の少女が現れた。今度はどんな注文をつけてくるのか。嫌悪の顔をしながら彼女を迎えたが、意外な顔、心配しているようだった。

「だから早く答えをと言いましたのに……」

これが天使と呼ばれる由縁か。なるほど、納得できる。

持っていたコップを適当に置き、一つため息。

「先ほど何かを言おうとしていたようですが、何を？」

分からないふりをして、彼女は首を傾げた。なぐんかかわいくない。そしてむかつく。そんなことで怒っても何にもならないので、俺はさっさと答えをいうことにした。

「守ればいいんだろ。どうせ家族とは会えないし、ここにいるだけで何もやらないんなら死んだ方がマシだし」

半ば投げやり。それで俺ははたかれた。何が起こったか分からない中、彼女は胸倉を掴んでこう言った。

「私の前で、死ぬなどと言わないで下さい！」

俺は深海に沈められたかのような恐怖を覚えた。彼女の目と言葉が異様に頭に残る。彼女は自分のやっていることに気づいたようで、すぐに手を離れた。お嬢様でもこんな風に怒るのだな。彼女は自分のやったことを恥らって顔を赤らめた。

「と、とにかく、貴方は私を守護するのですから、簡単に死んでもらっては困ります。……だから、そんな風に言わないで下さい」

さつきとは違う、悲しみの目。それは紛れもなく普通の少女の瞳だった。

「……分かったよ。もう言わないよ」

「絶対ですよ」

怒った顔でこちらを見てくる。俺は虫を振り払うかのように手を振る。それに違和感を覚えた。

「いつから外されてた？」

「貴方の答えは分かっていましたから、部屋から出る時に枷は全て消しました。気づかなかったのですか？」

気づくも何も、気絶してたし。そういえば普通に水ももらってたな。そういうや寝れてるし！ 良く考えれば、気づいてなかったのはおかしかったのかも。

とりあえず俺は人生最大の危機を脱した、と思う。明日からは学校だ……。教科書とかどうするんだろ。適当な不安を持ちながら、俺は再び眠り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931a/>

Non if

2010年10月28日05時58分発行